



人面

滝町古窯

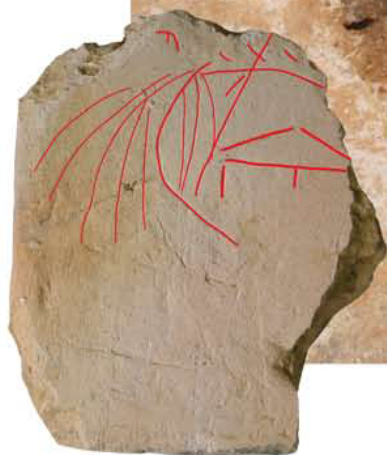
調査成果報告会



「栗田」銘



連房式登窯全景



「建物と柳」?



家紋?



写真1 トイレ検出状況
滝町古窯通信3号の時より更に調査を進めた結果、
埋甕が見つかりました。



写真2 物原掘削状況
物原とはゴミ捨て場のことで、多くの窯道具や失敗
品が捨てられていました。



写真3 001SX遺物出土状況
物原から唯一見つかった完形品です。匣鉢にくっつ
いたため失敗品となったようです。

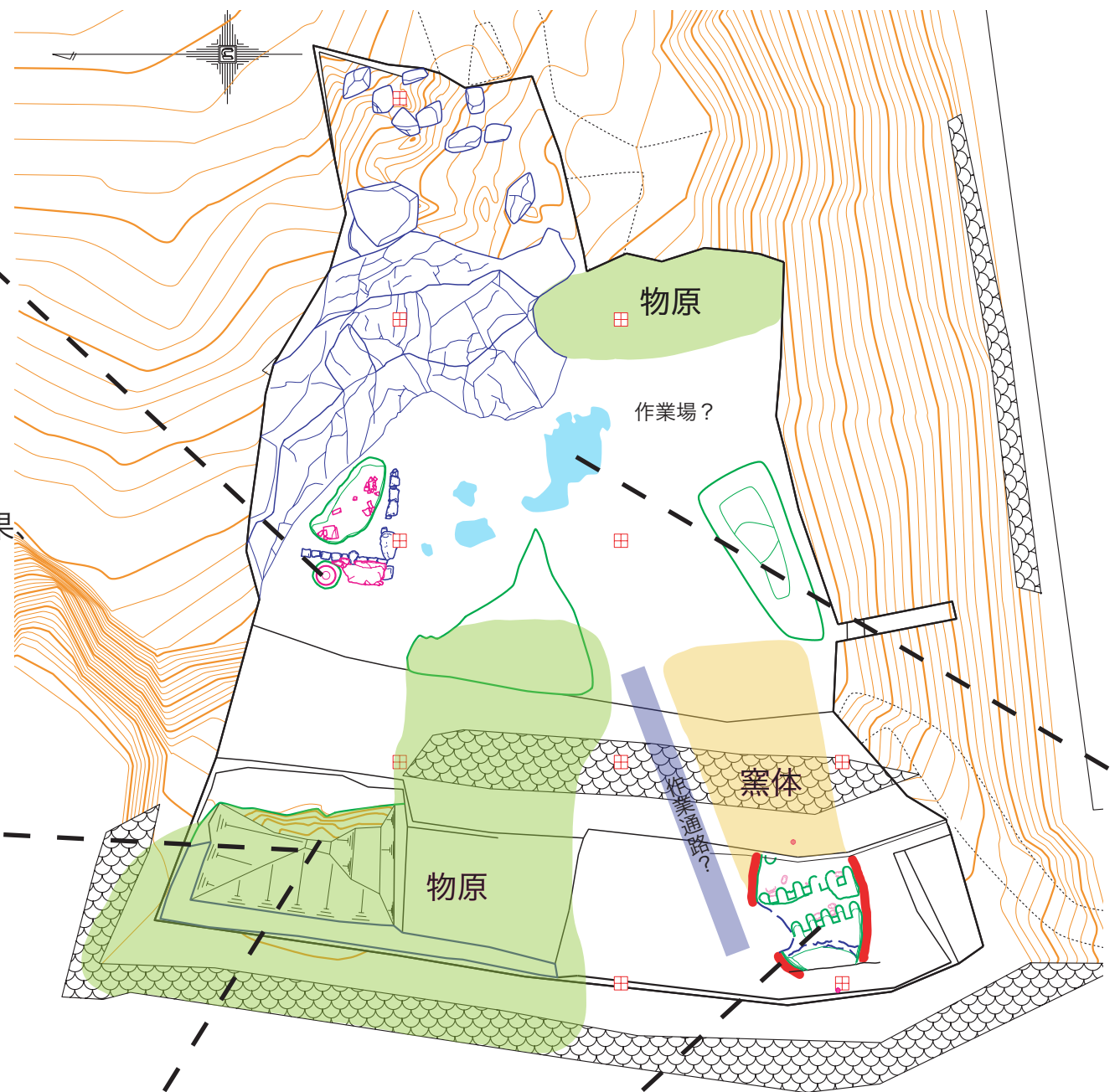


写真5 窯体完掘状況
今回の調査では胴木間（燃烧室）を確認しました。



写真5 中段平場掘削作業
ハケや手スコを使って土を取り除きます。



写真6 平場遺物出土状況
窯体付近の平場では失敗品や窯道具が集中して
出土しました。



写真7 窯体発掘作業
窯の内部は熱を受けて硬くなり、周囲の地面も赤く
変色しています。

滝町古窯跡 発掘調査で確認された窯体と出土遺物について

< 1 窯体 >

確認されたのは、西に開口する焚口（付近）と胴木間・一の間（または捨間）・二の間床面（壁面でのみ）である。天井部は滅失して不明。横室型・縦狭間構造をもつ連房式登窯で、規模は最大幅 2.5m、長さ 2.8m の範囲を確認した。胴木間の奥行（狭間柱前まで）は約 90cm、次の間へ続く狭間孔は 1 箇所欠損しているが 6 基と推定される。床面の傾斜角度は約 25°。一の間の内幅は 2.3m、奥行（狭間孔後方から狭間柱前までの距離）は 40～45cm、床面はほぼ平坦であり薄い砂層が残る。出入口は検出されていないが、地形と物原の分布範囲などから、窯の左側（北側）と考えられる。

< 2 製品類 >

小型の磁器碗類（端反碗、広東碗形）が主体であり、陶器は少量の行平鍋、急須、小型の碗など。（ただし、匣鉢は小型碗以外に用いる浅いタイプ、大型の径のタイプが少量あり）

< 3 窯道具類 >

匣鉢・エブタ・「センベイ」（トチ）・輪トチ・ニギリ・箱クレ・角クレ・丸クレ・棚板がある。匣鉢はすべて円形で、径は 12～13cm 前後で凸底のものが大半を占める、平底は径の異なるタイプに少量。みられる。エブタは円形と正方形とがあり、径または一辺が 13cm 前後、厚さは 1.7～2.0cm。ほとんどが再利用されている。

< 4 刻画・刻書資料 >

焼成前の窯道具類にへうなどで絵や文字を刻んだ資料。正面向き人面（円形エブタ）／花と「月方画」（円形エブタ）／「栗田」（円形エブタ）、「□田」（凸底匣鉢）／「東叡山 青龍院内 栗田源二郎 源盛方」（注）と裏面に家紋か（円形エブタ）／柳と建物、鳥（角クレか）

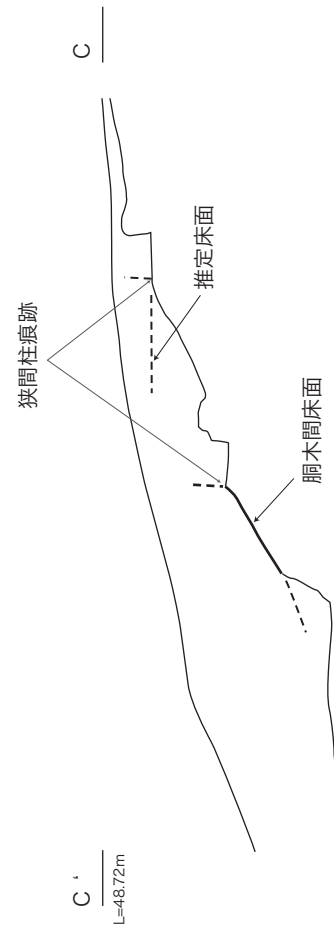
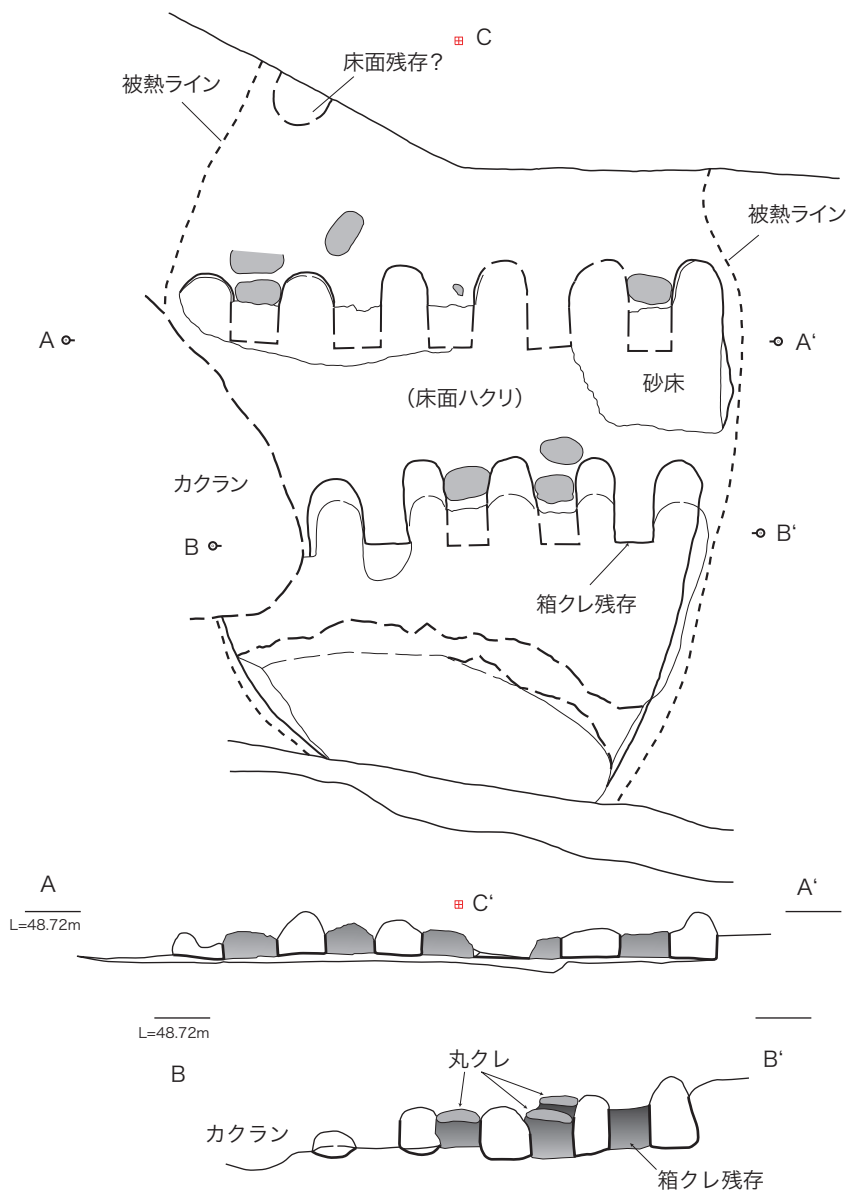
< まとめ >

- ・窯体構造、窯道具、製品のいずれにおいても瀬戸地域の技術の影響が強く認められる。
- ・窯の操業は 19 世紀の前葉から半ばにかけての時期と考えられる。
- ・窯体は非常に小さく、主に小型の磁器碗という器種のみを焼成している。生産・経営の形態や規模といった面からみて一般的なあり方とは考えにくい。
- ・窯は瀧山寺の寺領内に立地し、寺との関わりを示す窯道具が検出されている。瀧山寺が直接経営に関与した可能性がうかがわれる。
- ・近世後期の段階で瀬戸・美濃地域以外に岡崎でも磁器生産が行われていたこと、「寺院」が経営する特殊な性格の窯と考えられること、瀧山寺をめぐる歴史に関わる具体的なモノ資料であることなど、多くの新しい情報を含む貴重な発見となった。

（注）「東叡山」は上野寛永寺のこと、将軍家光の頃寛永十八年（1640）、亮盛上人が瀧山寺住職となり、四百十二石の寺領を賜った。さらに瀧山寺本坊の「青龍院」と同じ寺号の一院が設けられ両寺の兼任を命ぜられた。

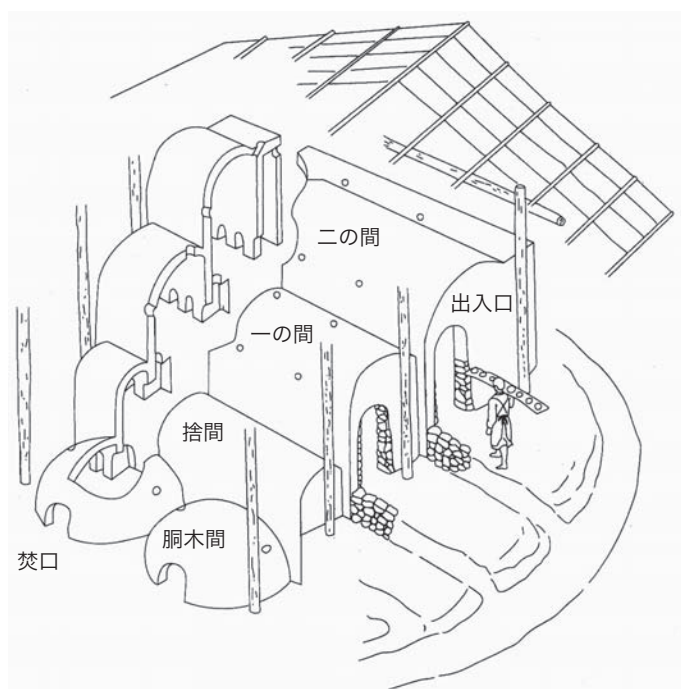
瀧山寺（天台宗延暦寺派）。将軍家光の頃正保二年（1645）、家康公誕生の地の守護神として瀧山東照宮が造営される。

参考文献 『岡崎市史』／「瀧山寺」発行パンフ

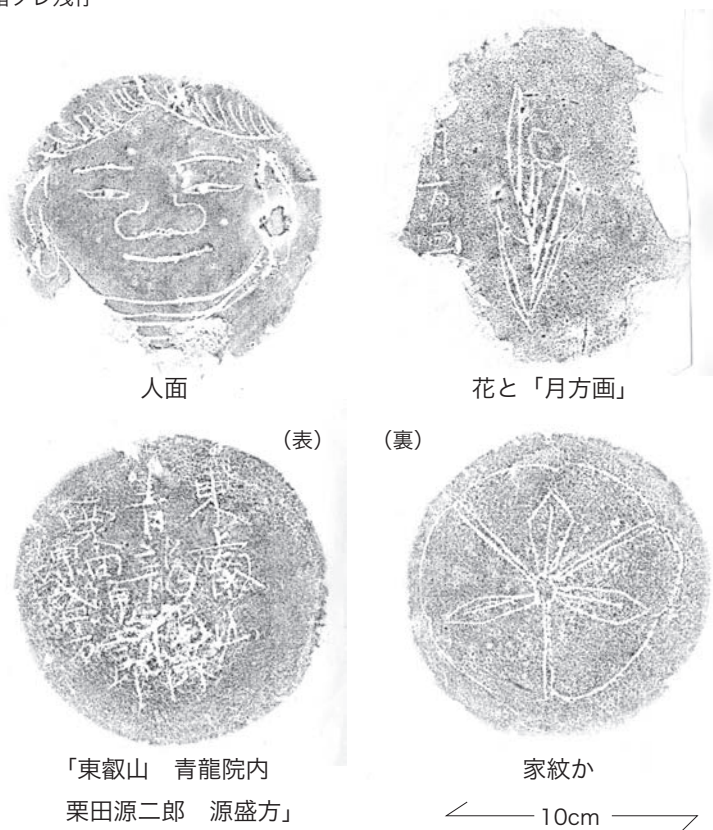


瀧町古窯跡 窯体図 (S=1/30)

1 m



古窯復元図 (瀬戸市・赤重窯跡現地説明会資料図に加筆)



刻書・刻画エブタ (S=1/3)

滝町古窯は、岡崎市滝町入山の西斜面に営まれた連房式登窯です。今回の発掘調査は、急傾斜地崩壊対策事業に伴うもので、愛知県埋蔵文化財センターが4月4日～7月11日の期間で調査を行っています。調査前の地形は石垣によって上・中・下段に分かれており、主な成果として近世の窯跡に伴う遺構の他、近代～現代のトイレ遺構などが見つかりました。

窯体^{ようたい}・・・窯の前方、薪^{まき}を燃やす焚口^{たきぐち}付近から胴木間^{どうぎま}と呼ばれる部分が見つかりました。窯の延長部分は石垣の中に残っていると考えられます。

物原^{もののはら}・・・窯の北側に広がりが見られました。物原とは使われなくなった窯道具や失敗品を廃棄した場所で、大量に捨てられていました（写真2）。

トイレ遺構・・・中段北端で見つかりました。東側に平らな石を並べた区画があり、その内側に漆喰^{しっくい}が貼り付けられ、漆喰の欠けた部分には常滑焼^{かめ}の甕が埋められていました。

出土した碗類や窯の特徴などから、この窯は19世紀前半から半ばにかけて操業したと考えられます。

瀬戸では文化三（1806）年に磁祖^{じそ}加藤^{かとう}民吉^{たみきち}が有田より磁器生産の技術を持ち帰り生産が開始されたと伝えられていますが、ここ岡崎でも天保（1831～1845）年間頃より瀬戸に続いて磁器生産が行われていたことが明らかとなりました。